

忌辰録の改版に際して

名人忌辰録は先人晩年のすさみにて、三百年來の學者文人僑傑の士、工藝技術の達人、奇言畸行を以て聞けたる、さらぬも何事にか、一ふしの名を得たるは、其の死亡の年月日を記し、墓地も知られたる限り書き添へたり。さればたま／＼高貴顯官を收録したるも、文藝を嗜み、風雅に遊べる人々のみに止められぬ。さて俳優の部は始より別に集録せしを合綴し、又情死刑死の二録は、零紙の餘筆に過ぎざれば、初版には省きしを、今回の改版に際し、一校して卷末に附したり。總じて初版は錯誤夥しくして、泉下の靈に對しては謝するに辞なく、且は大方の嗤笑も慚愧に堪へず。仍て更に校訂する所ありしかど、已が淺學寡聞なる、猶謬れるも少からじ。重ねて識者の教を請ふ。

大正癸亥孟蘭盆會の日

正直白す

忌辰錄
餘筆情死錄

關根只誠輯

情死の事、往古に聞く事なし。吉野拾遺(三ノ卷十四條)に此事始めて見えたり。里見主税之助が若黨、内侍の女の童と木深き山に入て刃にふして果けり云々、情死は南朝衰弊の頃より起る歎と天野氏の鹽尻に記せり。此處には淨瑠璃、演劇、講談などに名高きものを輯録す。

(頭書)幕府情死者に關する法令、古へは見及ばず。享保七年に男女申合相果候者之事とて、仕置例を出せり。當時情死さは勿論、心中さいふ詞も用ひず。公邊の書類には、皆相對死さいへり。借享保年度の法令左に、

一、不義ニ而相對死致候者死體取捨爲申中間敷候但一方存

命候ハ下手人

一、雙方存命ニ候ハ三日さらし非人手下

一、主人ト下女相對死致主人存命候ハ非人手下

但馬屋おなつ
手代清十郎

寛文二寅年五月廿九日情死

播州姫路の但馬屋さいふ商人の娘に、お夏さいふものありけるが、手代の清十郎と密通せしを、親聞つけて彼の清十郎を逐出せしに、おなつ男との離苦をかなしみ、清十郎が行く方をしたひさまよひし事、都鄙にかくれなく、京大阪江戸にて、巷歌に作りうたひし由玉滴隠見にみゆ。按ずるに見聞我集(延寶二年出版)また吉日鑑曾我(六冊鷺水作寶永七年板)第二卷にも當時の小唄を載せたり。

むかふ通るは清十郎じやないかの、ヨイヨイ、笠がよく似た、菅の小笠が、さりさはゑいやらゑい、そりやサア、ゑいやらゑい、笠がにたさてナ、清十郎であらばいの、ヨイヨイおいせまいりはゑ、皆清十郎が、さりさはゑいやらゑい」さ見はたり。さて之を戯曲に仕組たるは、寶永二年十二月竹本座(傾城反魂香)二番目(おなつ清十郎笠物狂ひ)

近松門左衛門作。同五年二人が五十年忌まで同人作(おなつ清十郎歌念佛)又江戸半太夫節(笠物狂ひ)の淨瑠璃有り。

又按するに、亂歴三本鎗(享保三年版西澤一風作)によればお夏清十郎かけ落して大阪へ立退きしが、引戻されて姫路にかへり、清十郎は主人の娘をかごはかせし咎によりて首を刎れられ、お夏は後年茶見世の婆さまで落ちぶれし由なり。されば心中にはあらずと云ふ一説あり。

笠屋三勝
茜屋半七

元禄八亥年十二月六日情死
大坂千日寺に葬る

攝州西成郡下難波村領墓所石垣之根端にて刃を以相果候男は和州五條新町赤根屋半七年三十四才女は長町四丁目美濃屋平左衛門女さん廿四才と云々。當時の代官所手代關戸條左衛門覺書にあり。此外掛り合名主庄屋檢使の書付、また兩人の遺書等事長ければ略す。之を演劇に仕組みたる始は、

翌元禄九年正月二日より、大坂劇場岩井半四郎座に於て「御評判の心中」と外題して、娘さんかつに花井あづま、茜屋半七に杉山勘左衛門、大當りなりしかば、右兩優と座本半四郎三人にて、千日寺に墓碑を建つ。碑面に「嵐

雪月照信士「月雪妙霜信女」と刻し、左に「二ばさつのおうてなにならぶ袖の雪」死顔のなほうつくしき今朝の霜」と追善の句を彫付けたり。猶委しくは別に記せり。

額風呂の小さな
金屋金五郎

元禄十五年午年九月十四日情死

小三は籠屋町額風呂の湯女なりしが、後に島の肉綿屋の娼妓となり、金屋金五郎は歌舞妓役者にて、加茂川のこほ座の抱役者なりし由、小三は廿一才金五郎は廿三才といへり。委敷は別に記す

天満屋おはつ
平野屋徳兵衛

元禄十六未年四月廿六日情死

此心中の翌日廿七日竹本座にて「曾根崎心中」と看板をあげ近松の作にて五月七日開演す。「曾根崎模様」は豊竹座にて寶曆十一年五月興行。因に云時代と世話と一日に狂言を二切に仕組む事此時より始ると云。

紺屋徳兵衛
重井筒おふさ

寶永元申年正月十五日高津大佛の勸進所にて刃を以て相對死

翌年春甲賀三郎の切狂言におふさ、徳兵衛心中重井筒お初徳兵衛が梅田にて心中せし翌年ゆゑ「道行血汐の朧染」の文中に「おはつ天神記」の、道行知死期の霜の文句をとり

て「いせ」思ひに吳竹のふしをならひし淨瑠璃も、餘所の事よき慰みしが、今身の上なる霜の、一足づゝに消失せて、死に行く身のあぢきなや」云々

南水邊遊捨遺に萬年町紺屋徳兵衛、六軒町重井衛おふさ、寶永元年十二月十五日夜大佛掛所にて情死、徳兵衛家根つたひに忍び出、樽屋町へ下る文あり。上の卷四ツ辻にて古く人形にも遣ひ來るさ見え。歌舞妓にても徳兵衛羽織を落し、しらずにはいる。是れぬれ事師の親になり羽織さへ脱落すこの好みなるべし。寛政年中山文七焦茶眞岡木綿丸に桐の紋染たる羽織を落して這入る。幕外にて鬨引にて當りし見物人へ送る。日々羽織壹枚宛、日數三十日の興行、浪花市中の羽織も、殘らず桐の紋茶の羽織になりし程はやりしこそ。所々の吳服店にて此羽織をつるして賣りしと云

江戸にてもおふさ徳兵衛の墓さいへる有り。本所番場町多田薬師境内に在り三尺斗八角にて、寶曆□□十一月十四日と有り。徳兵衛の妻夫の爲に建しと云と實否儘ならず

市郎右衛門
天満屋おしま

寶永三戌年二月十八日情死

曾根崎天満屋抱おしま年廿三才、長柄村百姓助右衛門倅市郎右衛門年廿二才、天満屋の二階と長柄堤と、所を隔て、同時に死せり、

同年三月近松作にて心中二枚繪草紙とて淨るり出来る。

道具屋與兵衛
嫁おかめ

寶永四亥年四月二日情死

心齋橋通道具屋娘おかめ廿四才、養子與兵衛と梅田の墓にて心中おかめは死し、與兵衛は助かる。和州平郡谷の庵室に入て助給法師と改名したれど、七々ヶ日に當つて、自害して果てけり。此月近松作にて「卯月の椀」と外題し四月廿一日より興行、大當りの處、同年五月十九日夜與兵衛自殺せしかば、同月廿七日より又「卯月の色上」と題して興行、ますく大當りせしと云、

雜賀屋お梅
成田糸之助

寶永五子年三月十八日情死

一名高野心中とも云。寶永五年四月竹本座近松作おむの助心中萬年草」明和八年五月豊竹座竹本三郎兵衛作お梅角額嫉ノ蛇柳に仕組む。

萬屋助六
扇屋揚卷

寶永六巳年三月十一日情死

千日寺にて心中の處、女は即死男は翌十二日夕方死す
 同月廿一日より上巻 助六千日寺心中さいへる淨瑠璃出る。享
 保廿年に「萬屋助六二代衾」長柄堤にて心中するに作れ
 り。今専ら行はるゝ大文字屋の場は、明和五年十二月
 豐竹座にて菅專助作の助六 紙子仕立兩面鑑なり。又並木
 丈助作の二代紙子。此世界上方と江戸とはかはり有り。
 上方は心中狂言なり、江戸は男伊達の役割なり。江戸は
 正徳三年三月津打半右衛門作が始也。

菱屋手代 二郎兵衛
 同家下女 おまよひ

寶永六己年八月四日情死

本町二丁目菱屋四郎右衛門手代治郎兵衛同下女おまよひ、
 今宮戎の森にて心中。人呼んで今宮心中さいふ。翌七年
 正月竹本座にて近松葉林子作にて、丸腰連理ノ松」後改
 めておまよひ掛鯛心中さいへる淨瑠璃興行の處、大に行
 れたり。此掛鯛心中さいへる故は、今宮の森の松の木に、
 日野詣にて二人並んで首を釣りの心中なり。死さまと
 云殊に年季野良と下女心中は、いさ珍らしき事さて、大
 に評判せりぞぞ。

平野屋小 勘
 鍛冶職平兵衛

寶永七寅年六月朔日情死

京北野神明の森にて、備後町大文字屋利右衛門鍛冶商也の弟
 子平兵衛、北野鉄槌煎餅屋三郎兵衛姪曾根崎平野屋小勘、
 和泉屋と云茶屋より忍び出て心中。同月七日より新淨る
 り「心中水の朔日」と外題して出す

槌屋 梅川
 龜屋忠兵衛

寶永七寅年十二月五日情死
 小橋寺町徳光寺に葬る

翌正徳元年三月朔日初日にて竹本座冥途ノ飛脚興行。後
 安永二年十二月豐竹此太夫座にて傾城戀飛脚專助笛躬合
 作にて興行。

茶店のおそめ
 菊地 半九郎

正徳元卯年八月十八日情死
 清水本壽寺に墓有り

半九郎は京都二條城普請奉行附人、年廿一歳、おそめは
 祇園町茶店若松の女、年十七歳、鳥部山にて情死。此事
 をおそめ久松の狂言に作り込みたり。明和四年十二月豐
 竹座にて興行の染模様妹背門松さいへる淨瑠璃に、山家
 屋清氏衛が言葉に、お染さいふ名は世間にくらもある。
 それ鳥部山の心中がお染半九郎と云々、

柏屋 おさか
 茶碗屋嘉平次

正徳五未年五月五日夜情死

大坂九の助橋松屋町角一津屋久兵衛倅嘉平次年三十二歳

伏見坂町柏屋定吉の女郎さか年廿五歳、生玉にて心中同年八月朔日より生玉心中と外題して興行、

大經師おさん
手代茂兵衛

寶永三年歎

寶永三年九月竹本座近松作おさん大經師昔曆興行。他の例によれば、當年の情死ならむ。月日未詳。

紀伊國屋小春
紙屋治兵衛

享保五年十月十四日情死

十月十四日大阪網嶋大長寺十夜回向の折柄、小はる住僧に面會の上、先祖代々の供養を相頼み、回向料として金壹両を備へ、夫より佛縁のおしへを受け、猶我身の事なども頼み、膳部出しても箸もさらず居りしに、夜に入り治兵衛來り、是も住僧に面會致し、金壹両を施物として十念を受け、側に小春も居たれど、知らぬ人の振にて、私へもお十念を授けたまへさ乞ひければ、又候小春へも念頃にさづけ、一禮を述て出じに、間もなく治兵衛も出て庫裡の方へ趣きしは、四ツ時過なりしこかや、此翌朝境内に男女の情死ありしとせに、行て見れば傍に左の一紙有之

今宵はありがたき御おしへにあづかり忝奉存候私ども

淺間敷身の果未來の程もおぼつかなくぞんじ候何卒なきあこの御さむらひ被成下候はと忝奉存候これのみ御願ひ申上度書殘し申候

十月十四日夜

治兵衛
小はる

大長寺様

此文體之書振男の筆跡のよし、左すれば治兵衛の書置し成らむ。兼て兩人約して此寺に待合はせしにや。曾根崎紀伊國屋女小春實ハ年廿二歳、天滿御前町紙屋治兵衛年三十歳。享保五年十二月朔日初日、竹本座にて近松作小はる、心中天の網嶋興行、其後寶曆五年七月豊竹座にて治兵衛、心中天の網嶋興行、其後寶曆五年七月豊竹座にて小春、雙扇長柄松興行。

八百屋半兵衛
嫁お千代

享保七寅年四月五日夜情死
下寺町正念寺ニ墓有り

宵庚申の夜六日朝の事なり。谷町寺町大佛勸化所の門前にて心中せり。仍て四月六日晝頃より豊竹座紀の海音作お千代心中二腹帶さ看板を出し、同月九日より始む。同月二十二日より竹本座近松左衛門作にてお千代半兵衛宵庚申さ看板を出し、同月二十五日より興行。両座とも大當りせり云。二腹帯には千代二十四、宵庚申には二十七歳と

あり。半兵衛は三十五歳。

藝者おしゆん
井筒屋傳兵衛

元文三年十一月十六日
京要法寺に葬る

傳兵衛は釜座姉小路下ル吳服商井筒屋傳兵衛といふもの年二十三歳。おしゆんは川端の四條上ル先斗町近江屋金七抱おやまお俊さ云年二十歳。兩人とも聖護院社の大樹に首くゝり死したるなり。委敷別に記す

遊女おその
大工六三

寛延二巳年三月十八日情死

大阪南新家福島屋濱兵衛抱女郎その年二十二歳、大寶寺町大工の丁稚あがり六歳年十八歳、西横堀にての心中、同日北の新地の女郎かしく、身受されて天満老松町の妾宅に移り八重さ改名。同年二月二十九日此八重酒狂にて兄吉兵衛を殺す科にて獄門の刑に處せらる。其又翌日十九日、神崎にて。駕籠昇十右衛門さいふ者。多衆の馬方さ口論し雙方手傷を負はせ召捕らる。此事件を豊竹座にて同二十日朝淨るりに仕組み、八重霞浪花濱萩「新淨瑠璃、三月二十六日初日の處大當りにて八月晦日追興行す浪人伊太夫

延享二丑年十二月十三日夜情死但不相果

新内節に名高き尾上伊太夫心中の事は、當時の申渡書あり左に

延享三寅年十二月十五日揚屋入

無宿浪人

原田伊太夫

廿七歳

右之者儀津輕若松家來原田伊兵衛倅にて江戸詰祐筆役相勤罷在去春三月頃より新吉原江戸町壹丁目太左衛門店太四郎抱遊女尾上を買揚げ遊興致度々奉公之間を欠候儀を屋敷役人も存じ不首尾ニテ永之暇出可參方無之ニ付太四郎方へ罷越尾上と相對死可致旨申合去十二月十三日夜尾上所持之さすがにて尾上咽喉一々所突候上右之者儀腹一々所突候得ども兩人共不相果候ニ付日本橋に於て三日晒之上非人手下に申付非人頭松右衛門に渡遺す

新吉原江戸町一丁目太左衛門店

太四郎抱遊女

延享三寅年十二月二十五日入牢

尾上

廿三歳

右之者儀原田伊太夫去春三月頃より度々遊興に參り奉公之間を欠き屋敷不首尾に而永の暇出で參方無之に付可相果由申候處兼而夫婦之約束をも致置候上者さもくくに相

果候旨申合去十二月十三日夜所持之さすがを伊太夫へ渡
し右之者は咽喉一ヶ所伊太夫儀者腹一ヶ所突候得とも兩
人共に不相果候ニ付日本橋に於て三日晒之上非人手下申
付非人頭善七之渡遺す

延享四卯年二月十三日落着

伊藤伊之助廿一歲 明和六巳年七月三日情死
葛屋三芳野廿四歲

伊藤伊之助幕府御賄方伊左衛門悱、三芳野は京町二丁目
葛屋抱遊女伊三郎住、所割下水、兩人とも剃刀を以て情死。内分にて
兩人を本所猿江慈眼寺に葬る。法號、意實淨真信士心誠
妙真信女

此事を安永元年鶴賀若狹掾の淨瑠璃に明烏夢泡雪と外題
して大に流行す。亦戲場にては弘化四年大阪大西芝居に
て、時次郎中山文七、浦里澤村其答、鶴賀馬蝶動る。是
れ初なり。東都にては、嘉永四年春、市村座假名手本忠
臣藏第八段目の裏山名屋浦里、春日屋時次郎明鴉花濡衣、浦里坂東
うか、山名屋四郎兵衛大谷友右衛門、時次郎市川團十郎、
淨瑠璃清元太兵衛連中、是江戸にての始なり。

藤枝外記 天明五巳年七月九日情死
遊女綾衣

外記は食祿四千石の旗本寄合格なり。吉原大菱屋抱遊女
綾衣と、同人部屋に於て自分脇差を以て情死したり。然
る所有體に届けては、家斷絶に及ぶを以て、用人尾崎郡
兵衛の入智恵にて、外記死骸を家來辻團右衛門と申立て、
一旦事相濟みたる所、後日に事實露顯し、天明五年八月
十三日既に淺草田甫幸龍寺に埋葬せし外記の死骸を掘起
し、再檢視あり。外記の祖母本光院妻女家來皆々公儀に
對し不束之儀に付親類共へ相渡し、押込め申付けられ、
外記死骸は一時假片付申付けられらるる處、更に親類方
へ受取、勝手次第致すべき旨水野出羽守より差圖にて、
同年十月廿九日落着。

陳仁謝清人 文政八年九月廿一日長崎丸山妓樓にて情死
遊女錦山

これは演劇講談等にもなけれど、珍らしければ附記す。辭
世の詩歌さて、

携手回頭望故郷、秋雲漠々海茫茫、人情難謝紅顏子、
恩愛堪慙黃暗郎、朝憶歸帆腸萬斷、夕愁離別淚千行、
但恨同穴不階老、和漢異生死一場、 陳仁謝
から衣深きなさげの人にわかれ
承らへてなごつまを重れん 連山

陳陽達 遊女初瀨

天保十四卯年正月十一日長崎丸山妓樓に於て

男は廿五歳女は十九歳さいふ。是にも詩歌あるはなかし。

欲語淚痕瀟錦筵、紅顏粉黛俱應憐、千歳一夢一時盡、

空作北邙山上煙、

陳陽達

今を世の限りぞぞ思ふそこゝろより

わきたつものは涙なりけり

初瀨

右二つとも事實はありしなれど、辭世の詩歌は、同地譯官など好事者の戯作ならむ。

○眞の情死にあらざるを、淨瑠璃狂言にて、心中に脚色せしより、世上に心中と云ひはやされしもの、實説左に、

油屋おそめ 丁稚久松

實曆七年九月廿七日

是は情死にあらず。實説は浪花東堀瓦屋橋通りに住む、油屋新五郎娘おそめ、二歳の時丁稚久松十三歳なる者、お染を前の川邊の土手に遊ばせぬたるがいかゞあたりけん、お染は前の川水へ落ちて死す。是實永七年九月廿九日の夕方なり。新五郎怒り悲みこにて久松を土藏の内、に押し込め置きたるに、翌十月朔日土藏内にて縊りて自死

信濃屋お半 帶屋長右衛門

實曆九年七月

實曆九年七月の事にて二人とも京の者長右衛門お半親に頼まれ大阪に連行く途中盜賊の爲に殺害され二人ともに情死の體になし桂川に投入れたり。數年の後賊の一人捕はれて、一切を白狀せしと云。委しくは譚海にあれど長ければ略す。
此事を心中に仕組みしは、近松東南作おはん桂川連理 榎安永五年十月、北堀江竹本此太夫座にて初演、大當りせしと云。

○眞の相對死にはあられど、猶痴情のはての死傷にて、演劇に仕組まれたる高評のもの少々記すべし。

孫福 齋廿五歳

寛政八辰年五月六日自害

油屋おこん廿四歳

文政十五年二月九日病死

世に傳ふる伊勢の古市油屋おこん眞の實説は、志州鳥羽 稻垣對の藩醫佐藤某の二男享次郎、幼年の頃御師孫福九馬守

大夫の養子さふり、名を齋イツキ改め、寛政四年の頃、醫術修行の爲京地へ出て、某醫の門に入り、其業を學びて、同七年秋養家へ歸り、醫を以て業とせんさしたる折柄、或朋友にいざなはれて、古市町油屋の茶汲女おこんさいへるになじみ、あばく彼の許に遊びたるに、おこんも深く思ひをかけ、末は夫婦と約せり。此時大阪の商人にて、井澤文三郎さいふ者、參宮の折古市に遊び、おこんが艶色を深く愛し、終に大金を以て身を購はんさす。この事を齋に告るものありければ、よくも糺さずして、一途に女の心變りせしと大に憤り、終に寛政八年辰五月四日の夜、清右衛門母井婢女を殺害に及びおこん其他六人に手を負せ、庭口よりそこを逃去り、夫より間の山の麓なる石橋の下に潜み居たりしが、五日の眞夜中、そこを出て、もよりの茂樹のもとに隠れ居たれど、穿議のきびしきに、まてものがれぬ事と覺悟して、六日の未明に養家へ歸りしに(養父は先年病死)母は飯の支度して居たるか、齋を見て大に驚き、直に奥の茶室の戸棚へ隠し、母は涙ながらに此度の始末を責めて、上の穿議の嚴重なるに、爰に居ては召捕はれん。今宵妾をかへて、遠國に趣くべしさいへるに、齋は兩手を突て此程の不埒をわび、

且所詮遁れぬ重罪なれば、此家にて自殺して果なんさいへるに、養母もさゞむる事を得ずして其意に任す。今飯の出来る間、心靜に食事して、いさぎよく自刃せよさいむるに、黙し居たるが母は勝手の方へ行し間に、自害して相果たり。母は勝手に居て此自害を知らざりしと云。油屋の騒動の翌朝、山田奉行野一色兵庫頭殿より御觸書出し其寫

宇治浦田町孫福九太夫伴 孫 福 齋

右之者昨四日夜古市町油屋清右衛門宅において清右衛門母親井茶汲女及殺害其外之者江も手紙爲負逃去候趣相聞候年廿四五歳に相見え惣髪にて色白柔和に相見候右之者見當り候はば早速捕押へ早々可申出候萬一隠置後日相顯に於て者かくまひ候者は勿論其所之役人共迄嚴數咎申付候間町在裏家迄無油斷穿鑿可致候

五月五日

右御觸之趣承知仕候拙寺寺内に右休之者曾て隠し置不申候若隠し置候而後日相知申候はば拙僧可爲越度候仍而差上申一札如件

寛政八丙辰年五月六日 寂照寺 月仙印

内宮御會合衆中

(頭書)其頃古市のふらはしは、山田宇治邊の壯年輩へは

無代價にて茶汲女を馴染さふせじさぞ。斯くかき置く時は茶汲女が尼ぬゝ杯云逃走をふす事なき故にて、然らざるまきは、折々逃走をふすものありて、雇主は損失をふす故、壯年輩を付置くからはじにて、客とする者は齋宮の人のみ、目あてさするものさぞ。齋も油屋清右衛門の抱之茶汲女古市は遊女制禁にて揚屋すべて小茶屋と稱し門戸のかたはしには茶釜を据へ水茶屋に擬すただ茶屋とも稱し遊女も茶くみおんかき呼ぶあり又云萬のま呼ぶ仲居の名稱は作名からず、都て勢州地方の下婢は、名の下にのゝ字を附け松の龜のまごま呼ぶ故、萬のは萬さいふ呼名あり、此萬のも其時に負傷せしが、治療かふひて七五六歳迄存命し天保中歿せり。此萬の、物語りを口碑に傳ふる處ありま云ふ、

又戲場にておこんに粉するもの、太々神樂の場へ前垂をして來るも、此地の古き風俗あり、川崎音頭の唱歌に「茶汲女の前垂を結ぶごげんの二世かけて、相のやなぎの一踊り云々證さすへし(以上頭書)

此一條を戲場に脚色せしは、大阪角の座にて同年八月五月初日、近松徳三作伊勢音頭戀の寐録と名題して大當りせり。是より前七月京四條南側早雲座にて川崎踊拍子と名題して齋宮嵐三五郎油やおこん芳澤圓次郎にて二幕出 此伊勢音頭の仕組尤佳作るにより、今に此形に

て脚色せり。此時齋宮此頃より中山文七、おこん芳澤いろは、伯母おみれ山下金作、料理人喜助嵐雞助、仲居まんの正直太夫中山文五郎、さる田彦太夫嵐傳五郎、今田萬太郎坂東重太郎、藤浪左近關三右衛門、

江戸に於て始めては、享和三年二月河原崎座にて、姫小松の二番目に興行せり。福岡貢 坂東彦三郎、おこん中村大吉、おみれ二役庄太夫市川友藏、彦太夫桐谷門藏、仲居萬の坂東彦左衛門、料理人喜助市川荒五郎、左膳山科四郎十郎、

(頭書)おこん手紙の爲に一時は命も危かりしも全快し油屋の厄介さありてありし由。

おつま 八郎兵衛

情死にあらず。大阪にて淨るりに作りしより世に評高し。

春廻屋筆記(寫本十五卷)卷三に、「お妻格子の事」六軒町の小夜格子、玉屋町のお妻格子といふ名は、今に人口に膾炙す。おつま格子といふのは、中橋筋八幡筋より北東側にて、當時榎並屋某と云醬油屋の邊あり。世人の口碑に残れり。古手屋八郎兵衛の爲に害せられしおつまといひし女郎の住し所故其名あり。五十年斗り以前迄ありしと云。又八郎兵衛の唱歌は俳優元祖嵐三右衛門の作なる

由、然らばお妻八郎兵衛は元祿の初めの事にや。三右衛門歿年は元祿三年午十月十八日あり。明和元年八月中の芝居にて、「齋月恨切子」と云狂言を勤めしは、七月下旬阪町の妓婦若野さいふもの、法善寺の細合にて切害せられしを、一夜附に仕組み、八月朔日より切狂言に出し、享保二年の古外題を用ひし也。

通り筋のぞめき歌節と唱歌は我身をせむる

心の鬼は丹波のお妻

昔の古手
今の新物 齋月恨切子

千日寺の鐘の聲四ツと二ツは我身をく

うふき谷の八郎兵衛

此後明和六年四月大阪道頓堀大西の芝居にて、おつま八郎兵衛堀江川浮名血汐」

操上るりに演じたる初は、明和六年二月竹本座にて「妻重浪花八文字」これを安永三年十一月改作し「櫻鏢恨絞鞘」として興行。是れ「鰻谷」として評判ある狂言の原作あり。

(頭書)春の屋は通稱笹屋新七、性陸田と云ふ亀甲職人也。作名千代彦。狂歌を好めり。尾州の人にて後京地に住す。

天保の頃攝州西の宮の東北にあたり。武庫川の東武庫村の神宮寺に寓居せり。

藝者みよ吉
ちゝみ屋新助

文政三辰年三月十八日殺害自殺

この實説は當時の届書にて能く知らるそは

深川永代寺門前町平六奉申上候私店みや後見利助下女、ささ申廿歳に罷成候者當十八日同所永代寺門前仲町彦兵衛店龜次郎抱藝者みのを連れ本郷四町目家持甚兵衛弟甚之助と申客に被召連神田花房町文次郎店伊助雇船に乘築地邊へ罷越候船中にて同夜四ツ時頃甚之助子細不知みのを害じこ甚之助さも水中に飛入候様子にて右兩人死骸相知不申依て十九日御訴申上候處御檢使の上夫々御調口書差上一同被召出こ甚之助死骸見當り次第御訴可申上旨被仰渡候に付海中所々相尋候大森村海岸にこ死骸有之甚之助死骸は深川洲崎沖にて見當り右兩人死體御檢死之上取捨被仰付候以上 三月廿一日

右の通り、新助實名甚之助は、本郷四町目呉服店甚兵衛の妻の實弟(甚兵衛は智養子)にて二十二歳。みよ吉のみのは、下谷の御家人森傳右衛門娘にて十九歳あり。甚之助放蕩者にて藝者みのの色香に迷ひ勘當せられ、一時淺

草一月寺に入りて、虚無僧にかり居れり云。藝者みのは、八丁堀船宿鈴木熊次郎といふ情夫ありしを、甚之助聞き知り、嫉妬のあまりみのを欺き、船遊につれ出し、恨みを云ひ不實意を怒りて、殺害に及びしかり。甚兵衛店は、明治の始まで續きて同所でありし由、近隣足袋屋の老母、八十余才の長命にて、甚之助をも能く知り居れりとの直話あり。此事を狂言にせし始は、同年七月十五日より、中村座に於て大名題「忠孝染分纏」の中へ、おつま八郎兵衛の替名にて興行、八郎兵衛に關三十郎、おつま岩井桑三郎相勤む。其後萬延元年七月、市村座に於て「八幡祭小望月賑」を外題し、縮賣越後新助に名人市川小團次、野花屋みよ吉に岩井桑三郎にて大當りせしより、此狂言今に小？次の型にて演ずる例さふりぬ。又此時小團次桑三郎森家の菩提所根津川端本壽寺に就いて、みの、墓詣をせしより、後此狂言を演ずる毎に、同寺にて供養の讀經をふす例さもふれり。

以上の外にも心中數多あれども、爰には淨るり芝居等に仕組みて、名高きものを記せり。

因に云、元祿十六年版「心中戀の塊」また「名寄かのこ」五冊

情死録終

版本、なほ「心中大全」といふ草子もある由、昔はかゝる事柄をも書續り出版、世に弘めしが、後御禁制になりぬ。又云、續南水漫遊に、寛政五年二月十九日坂町にて心中あり、男女の死骸を千日墓前にてさらしものせり、見物夥しかりしが、其後心中の晒物は止むさあり。